

ジャンバッティスタ・ティエポロ作《聖シモン・ストックに現れる聖母子》 に関する一考察 —— 目を閉じて祈りを捧げる聖人と禿頭の老人の描写に着目して

柴田 桃佳 (東北大学)

18世紀ヴェネツィアを代表する画家ジャンバッティスタ・ティエポロ(1696-1770)は、1743年から1749年にかけてヴェネツィア、カルミニ大同信会館2階大集会室の天井装飾を手掛けた。本発表では天井中央に設置された《聖シモン・ストックに現れる聖母子》に焦点を当て、本作における特異な表現、目を閉じて祈りを捧げる聖人およびその背後にいる禿頭の老人の描写に着目する。そしてこれらの表現が注文主カルミニ同信会の信仰と宗教的实践に基づくものであることを明らかにする。

本作の基本的主題は、13世紀イングランドのカルメル会士聖シモン・ストックの前に聖母が顕現し、救済の約束のしるしとしてスカプラリオを与えたとする幻視の奇蹟である。最上階の天井に置かれた本作品は著しい仰角で描かれている。宙高く浮かぶ聖母に対し、シモンは体を固く折り曲げるように跪いて祈っている。彼の目は閉じられ聖母を見ていないことが分かる。その背後の地面にはおそらく平信徒を表す老人の禿頭があり、シモンと同様に身を低く屈めて祈っているように見える。シモンの右手は画面右下の煉獄にいる死者の魂を指しており、彼および老人は死せる魂たちの救済を聖母に祈っていると受け取れる。

このような描写はこの主題を表した先行作例には見られず、画家による作為的意図が感じられる。ニコラ・ミニャールによる作品(1644年)やガブリエル・アントニオによる作品(1697年)のように、シモンの幻視を描く作例は対抗宗教改革期以降に増加したが、それらの例ではシモンは目を開き見上げるようにして直に聖母を幻視している。本作はこうした先例から離れ、シモンおよび平信徒が聖母を見ずに祈るといった新しい図像を提案している。

先行研究(Levey, 1986)では、制作当時、シモンの幻視経験の信憑性を疑う議論があったことを踏まえ、本作は幻視の真正性を再提示する試みとされている。しかし、作中のシモンは聖母を見ていない。むしろ本作の描写は、幻視体験を大前提とした上で、地上におけるシモンおよび信徒の祈りの行為を示していると見るべきである。発表者は、このような画家の試みが注文主カルミニ同信会の信仰と活動に基づくという仮説を提示する。

同信会の活動の一つには物故会員の埋葬や追悼があった。大集会室に集う会員たちは、本作のシモンと老人が祈りによって煉獄の死者たちの救済を聖母に執りなそうとする姿に自らの信条を重ね合わせることができただろう。さらに、同信会の母体であるカルメル会の起源は、預言者エリヤが築いた礼拝堂に信徒たちが集まって聖母に祈ったことにあるとされており、本作におけるシモンと老人の姿はそのような修道会の精神とも一致している。

ティエポロは当時論争の種となっていた幻視の信憑性そのものからはあえて焦点をずらし、同信会の現実的活動に調和した新しい図像を提供したと考えることができよう。